LagoN/s

発行元

新潟青陵大学
現代社会とメディア＝
Kさん

新潟市の個性「潟」

日本初の条約湿地都市

夕暮れ時の佐潟で休む野鳥たちと後ろにそびえ立つ角田山＝1月8日、新潟市西区

「80万都市の新潟市に潟が16もある。こんな都市は世界でも珍しい。潟は新潟市の個性、宝なんです。」と新潟市里潟研究ネットワーク会議座長の澤口晋一さん（64）は語る。湿地面積が市の44％を占めるなどの風土の特徴に加え、湿地の保全、賢明な利用が評価され、2022年の11月、新潟市は日本初のラムサール条約湿地自治体認証を受けた。なかでも西区の佐潟は1996年に日本で10番目の「ラムサール条約湿地」に登録された。また、中央区の鳥屋野潟、北区の福島潟が条約湿地の潜在候補地として挙げられている。

ラムサール条約は正式名を「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」という。実際に佐潟はハクチョウの越冬地として利用されている。また、新潟市は日本一のコハクチョウ越冬数を誇り、2014年には市の鳥に制定された。条約の要項として、湿地の「保全・再生」・「ワイズユース（賢明な利用）」・「交流・学習」がある。

保全・再生を目指す活動として、現代版潟普請（潟き水を出やすくするために泥や枯れた水草を除去する活動）が行われている。ワイズユースにおいては、佐潟のハスの花がお供えに用いられている側面が評価されている。交流・学習の活動として、小学生を対象とした自然体験企画や、新潟市の各潟におけるガイドブック製作がある。

しかしながら、新潟市のこのような側面が人々に浸透しているとはいえない。

以前、新潟市潟環境研究所が「ラムサール条約を知っていますか」というアンケート調査を行ったところ、約8割の人が、言葉は知っているが内容はわからないと答えたという。これに対し澤口さんは「行政にも市民にも湿地都市をどう広めていくかという意識が希薄です」と指摘した。また、新潟大名誉教授の大熊孝さん（81）も、自治体認証を受け、「新潟市は『湿地都市』（Wetland city）と呼ぶべき」だと指摘した。

湿性遷移による潟の消滅

水質悪化・外来種侵略などの課題

新潟市の潟には、「水質悪化」、「外来種による生態系の破壊」などの課題があり、環境保全のための活動や対策が求められている。水質悪化の課題の根幹には、潟の「湿性遷移」の性質が挙げられ、適切な管理を怠ることによって、潟は消滅してしまうのである。また、外来種の侵略によって、ハスの消失や在来種の減少している現状がある。

湿性遷移とは、水のある場所において生育・生息する生物種集団が自然に移り変わる現象のことである。潟のような広い水辺の場合、潟岸の浸食・崩壊、外部から流入する土砂、潟内部で生産される生物の遺骸により堆積物が増加し、潟底に堆積していくことによって、水深が浅くなり、「湿地」から「草原」へと姿を変えてしまう。

この湿性遷移の過程において関連する課題が「水質悪化」だ。新潟市の潟における水質悪化の原因として、宅地化による生活雑排水の流入に伴うヘドロ堆積、農薬や肥料の流入に伴う富栄養化によるアオコ発生がある。実際、佐潟の水質は近年悪化傾向にある。水の汚れ具合を示す化学的酸素要求量（COD）1㍑あたりの年平均値は、条約認証時の1996年は18㍉㌘だったが次第に上昇し、2018年には45㍉㌘とピークを迎え、22年度は35㍉㌘だった。

水質悪化により、ハスが育ちにくくなる上に、ミシシッピアカミミガメなど外来種による環境侵略が重なり、佐潟では、ハスが消失してしまった時期があった。

潟の環境を維持するためには、これらの課題への対策を「続ける」ことが重要だ。

水質悪化によりアオコが大量発生した佐潟の水門。水位管理が行われなくなり、水が滞留するようになったことが主な原因だと考えられている。＝2018年9月26日、新潟市西区(写真は佐潟ガイドブックから抜粋)

子どもたちの力でハス復活

潟の存在を次世代へ

ハス消失問題を改善するため、「佐潟と歩む赤塚の会」は、地元の赤塚小学校の子どもたちと協力し、2020年から佐潟の「ハス復活プロジェクト」をスタートさせた。このプロジェクトは、ハスを復活させることのみならず、子どもたちの手でハスを苗まで育ててもらうことを通じて、潟の魅力と現在起こっている問題を次世代へ伝えていくことを目的としている。

この活動は、これまでさまざまな困難があった。ハスの苗を植えた際、水門を多めに開いて水抜きを行った結果、潟底が干上がってしまったことや、夏場にアオコが大量発生し、水面が緑色になることもあった。その対策として、新たに水を溜めると、7月のCODは前年の77㍉㌘から29㍉㌘に改善した。これを受け、歩む会代表の涌井晴之さん（63）は「これまで策がなかったが、初めて改善への一歩が見えた」と期待を込めた。

しかしながら、ハスが潟面に広がっていくには、まだ時間が必要であると考えられている。ハスの復活は生物多様性、里潟の再生といった観点から見ても重要な意味を持つため、今後も活動を継続していく必要がある。

このような活動は、ラムサール条約における「ワイズユース」の要項に該当し、涌井さんは「将来の世代のために湿地が維持されるように持続可能な湿地の利用を意味しています。地元の佐潟で人間と自然との関係を取り戻す活動を若者とともに進めていきたい」と語る。

潟と人をつなぐ他の活動として、潟のガイドブック作製がある。これまでに4冊発刊され、現在福島潟版を製作中である。この活動に対し澤口さんは「全国的に見ても意味のある取り組みで、湿地都市としてふさわしいものになります」と語る。

潟コラム

市民へのアピールから

新潟市は日本初のラムサール条約湿地自治体認証都市であるという事実は私自身調査して初めて知った。この事実は国内のみならず国外にもアピールすることができる大きな新潟ブランドだ。▼現在の潟の様子を見るために、新潟市西区にある佐潟に足を運んだ。記事1の写真はその際に撮影したものである。潟は想定よりも広大で、多様な植物が散見された上、ハクチョウやカモなどの野鳥の生態をじっくり観察することができた。身近に自然を感じるにはうってつけの場所であるが、訪問者は少ない印象を受けた。▼題字の「LagoN／s」は、正式には「Lagoon News」である。“世界の新潟”という意味を込め、新潟を「New Lagoon」と英訳したことに加え、N／sには「新聞（Newspaper）」と新潟の「新（New）」の2つの意味を含めた。▼新潟市の政策には「田園型環境都市」として、まちづくりや交流人口の拡大、環境保全活動を推進していく方針がある。条約認証都市であることは、この政策の心強い追い風となるであろう。▼まずは「潟」が新潟市の個性であり、誇りであると市民が理解・自覚し、市外へのアピールにつなげることが重要だと考える。